
NARUTOに転生（凍結中）

オシリス

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

NARUTOに転生（凍結中）

【Nコード】

N5248V

【作者名】

オシリス

【あらすじ】

主人公がNARUTOに転生はたして主人公の運命は！！

俺は転生する

俺は夜月 朧、20歳の大学生だ。今俺は大好きなNARUTOの最新刊を読みながら大学へ向かっている

「へえー、こういう展開になるのか続きがますます気になるじゃねーか」

俺はNARUTOを読み終わるとカバンにしまい歩き出す。そこへ子供が走ってボールを追いかけているすると向こうからトラックがつこんで……………って、

「あぶね!!」

俺は子供を歩道に突き飛ばした

「（ああ、これで俺も死ぬのか……………NARUTOの続きが読みたかったな）」

俺はそう思うと体に衝撃が走り、意識を手放した

「……………んか……………きんか……………起きんかばかもーん!!」

「痛ってー!!」

頭に衝撃が走り飛び起きた……………っ

て、俺は死んだはずじゃ

「やっとなきよったか」

俺は声のする方を見るとそこには爺さんがいる

「爺さん誰だ？俺は死んだはずじゃ……」

「お主はワシがここに呼んだんじゃよ。ワシは神じゃ名をゼウスという」

「……お爺ちゃん、頭大丈夫？」

「頭は大丈夫じゃよ。……お主はトラックに轢かれて死んだんじゃが、

お主は子供を助けたて死んだので転生でもさせてやろうかここによんだんじゃ」

「マジで！！やっとなー！！」

俺はおもいっきり喜ぶ

「行きたい世界と6つの願いを言うのじゃ」

「5つもいいのか！！じゃあ世界はNARUTOで、能力は

1つ目…万華鏡写輪眼がほしい。右は……で、左は……だ。

もちろん須佐能乎も使えるように、

2つ目…性質は火・水・土の3つで血断限界は溶遁と木遁、血断淘汰は消遁（自分は姿を消すことができ、あらゆるモノをこの世から消滅させることができる）で

3つ目…十尾の人柱力にしてほしい。十尾は俺が行くNARU
TOの世界では2匹いたことにしてほしい

4つ目…うちはマダラに拾われ、暁の入るよくにしてくれ

5つ目…容姿は『ぬらりひよんの孫』の4百年前のぬらりひよ
ん……以上だ」

「わかった。では逝って来い」

ん？今爺さんの字が違ったような気が………ボタン

「………はて、気のせいかな、俺の足元からなっ
てはいけない音がしたような気が――――――」

俺はゆっくりと足元を見る。するとそこには足場がなく、暗黒の
世界が広がっていた。

それはつまり………

「………おぼえてろくそ爺――――――」
「―――！！！」

俺は落ちながら爺に恨みの言葉を精一杯叫び続ける。

「元気で――」

俺は転生する（後書き）

とくになし！！キリッ

原作開始前夜

〽 朧 〽

よお、朧だ。俺は今12歳だ。俺はうちの家に生まれてた。それからすぐ俺の両親は俺を森に捨てられて父さん《マダラ》に拾われた。俺は父さんもとで育ち5歳から暁に入った。6歳には万華鏡を開眼し、7歳には永遠の眼になった。

俺は8歳の時に、木の葉のアカデミーに潜伏した。九尾であるナルトの監視だ。暁で俺だけビンゴブックに載ってない（見付かる前に暗殺し、見付かったら殺した）からだ。

俺がこの世界に来て驚いたのは、ナルト・父さん・ゼツ・長門以外のキャラがみんな女だったってことだ。これは暁のメンバー紹介とアカデミーに入った二回驚いた。メンバー紹介の時から薄々きずいてたが予想道理だった。そして何気に一番驚いたのはナルトとサスケ（女）が同居してて、しかも互いに両思いということだ。……流石にこれには驚いたがもうツツコム気が失せたよ。

十『（おい朧、そろそろポイントに向かわねばならんぞ）』

「うん？ ああもうそんな時間か」

俺は十尾の言葉でようやくきづく、この十尾は父さんが入れたものだ。父さんこの世に十尾は2体（俺が神に頼んだ）存在していて、こいつは力が封印されているのよりも力が弱いので父さんは息子の俺に入れたんだ（『注…マダラは朧を実の息子以上に思ってますの

で、今作でのマダラは臍を絶対に裏切ったり殺したりません。あしからず』)。こいつとは7歳で和解した。

俺は今の家から出るとゼツとの定期報告のため、結界の張ってある森の奥まで向かう。

「すまん、遅くなったゼツ」

ズズズウウウウウ　ゼツが地面から出てくる

白ゼ「遅かったね。何かあったの？」

「いや、時間がたつのを忘れてただけだ。これが今回に定期報告だ」

俺はゼツに巻物を渡す

黒ゼ「ソウカ、確カニ受け取ッタ」

白ゼ「ねえ、ここに何時までも居て厭きないの？」

「厭きてるよとづくに、もう4年だぜ。」

黒ゼ「マア、後少シノ辛抱ダ。モウジキ木ノ葉ハ中忍試験ダカラナ、オ前ノ任務モソレマデダ」

そう俺は中忍試験までここにいる手筈、そう木の葉崩しの起きる中忍試験のある中忍試験だ。

白ゼ「後は明日の班決めでうまくナルトと同じになれたるだけだ

な」

「ああ、まあこれは運任せだな・・・・・・・・・・つと、ゼツそろそろ戻れ、誰かだ近ずいてる。みんなによろしくな」

スウウウーーーーー、俺は消遁を使い透明になっていく。

白ゼ「OK、伝えておくよ」

黒ゼ「マタナ」

ゼツも地面に消えると俺の結界が外から解かれた。すると辺りを木の葉の忍がいっぱいいた。数は3・6・9・・・・・・全部で20か隠れて正解だったな。

さて俺は帰って寝るか・・・・・・・・・・そういや今日はナルトイベントがあるんだっけ？まあいいや、明日が楽しみだな。

（朧）

原作開始前夜（後書き）

どもどもオシリスです。新しい作品、よろしくお願いします。

待ち合わせ

〽
朧
〽

チュンチュンチュン

「うんっっ! もう

今は………5時30分か、大体いつも通りだ。俺は布団から起き朝食を食べる。………と、何時ものがそろそろ起こるかな………

「……ナルト起きて朝だよ」

ナルト『んゝゝゝ、まだ眠いつてばよゝゝ』

『仕方ないな、……チュツ』

ナ『んっ…………おはようサスケ』

サスケ 『おはよナルト♪』

ナルト&サスケの隣なのだ。これはナルトの監視に丁度いいと思っ
たのだが・・・・・・この4年、つまり俺が来たとき
からずつつつつつと！！こうなんだ・・・・・・初
めは俺も驚いたよ。けどもう慣れた。

十『（毎朝毎朝よく飽きないあの2人）』

「（まあ、確かに、マセてんなー……………いつもの事だが……………」

俺はいつも思っている事を十尾をいつものやり取りをしながら準備をしていく。んだが……………

サ『ねえーナ・ルト、あーん』

ナ『あーん……………うん、うまい！！サスケいつもありがとう！！』

サ『いいよ。大好きなナルトのために作るんだもん』

ナ『……………サスケ』

サ『ナルト……………』

……………無視だ無視、
気にしててもしょうがない。

「さていくか」

俺は部屋の鍵を閉め出かける。今日は7時に集合の約束があるから少し早めに出る。

……………

・ ・ ・ ・

しばらくすると何時ものメンバーが集まっていた。

「何やってんだお前ら？ 集合はまだまだじゃなねーか」

???? 「あつ臃くん」

日向ヒナタ（女）。まあ原作とほとんど変わらない。ナルト好きは変わらず

???? 「・・・おはよー臃」

油女シノ（女）。無口は原作のまま。ナルト好き。（イメージは『ぬらりひよんの孫』のつらら）

???? 「遅いわよ臃!」

???? 「ワンワン」

犬塚キバ&赤丸（女）。性格は原作と同じのツンデレ（ナルトの前だけ）。ナルト好き。（イメージは『インフィニットストラトス』の鳳鈴音）

???? 「おはよう、臃」

秋道チョウジ（女）。原作と違って痩せていてお菓子もあまり食べない。ナルト好き。（イメージは『BLEACH』の髪は腰の辺

．．．．．あれ？．．．もしかして．．．
図星？

「まさかの図星ですか？みなさん」

みんな「．．．．．コクコク」

どうやら図星のようだ。

「あー．．．．．とりあえず先に行こう
か？今日は待ちに待ったイベントだしさ．．．
．どうせ2人はいつもみたいに長いだろうし」

みんな「そうだな」

俺の言葉にみんなうなずきアカデミーに向かう。さて、運は俺か
ナルト．．．．．どちらに味方するのか．．．
．．．．．

「楽しみだよ．．．．．まったく．．．」

（ 朧 ）

待ち合わせ（後書き）

こんな感じです。感想まっています。

第7班

（朧）

あの後、俺たちはナルトたちをおいて教室に先に来た。その後すぐに2人は来たので改めて紹介しよう。

うずまきナルト（男）、4代目火影『波風ミナト』と『うずまきクシナ』の子にして、九尾の人柱力だ。原作よりもミナトに似ているため、アカデミーないでも男女関係なくかなりの人気（朧も人気だが自覚なし）。

うちはサスケ（女）、暁『うちはイタチ（女）』の妹にして、イタチがもつとも愛する家族。みんなと同じくナルトが好きで、ナルトの恋人的存在……。いや、もう恋人そのものだ。（イメージは『インフィニットストラトス』のシャルロット・デュノア（黒髪バージョン）だ）。

生徒A「なんでナルトがいるんだよ」

ナルト「お前らこれが見えないのか？俺も今日から下忍だってばよ！」

キバ「まさかあんたが下忍になるなんてねー（ナルトが下忍になるなんてねえ！これはなにが何でも一緒にならないと！）」

シノ「……………おめでとうナルト（……………
……………ナルトと一緒に……………ポツ／／／／）」

シカマル「ナルトおめでとう！これで朧と3人で一緒の班になれるね！！」

クラス全員（シカマル・ナルト・朧以外）「ちょっとまで！！ナルトと朧とは俺（私）が同じ班になるんだ（なるの）！！」

シカマルの言葉でクラスの全員が名乗りを上げる

ナルト「うお！！なっ、なんだってばよ！！」

生徒B「だってナルトと朧の2人がいると楽しいしな！！」

生徒C「ナルトは一緒にいると落ちこんでも元気になれるし、朧は頼りになるからな！！」

生徒D「2人ともイケメンだし、優しいし言う事なしよね！！」

いの「シカマル抜け駆けは許さないはよ！！」

サクラ「ナルト君！！朧！！私と一緒にの班になろ！！」

サスケ「ナルト！！ナルトは私と一緒にだよー♪」

チョウジ「こらサスケなにナルトにくっついてるの！！」

キバ「ナルトから離れなさいよ！！」

サスケ「いーや♪」

シノ「・・・・・・・・・・・・・・・・うらやましい・・・・・・・・」

奴良隴。担当上忍ははたけカカシさんだ」

よし、上手くナルトと同じ班になれた。

サクラ・サスケ「（よし!!）」

他の皆さん（ヒナタ以外）「（チッ!!）」

先生が第7班のメンバーの名前を呼んだ瞬間、教室中に殺気が充満した（主に8班・10班になる者達から）。………が、先生は無視して班の発表を続けていた。どうやら意見を聞くつもりはないらしい………。

しばらくして班の発表が終わりみんな担当上忍がきて移動する………が、カカシは数時間待ってもこない………

するとドアの向こうに人影が現れた………カカシだ。原作だとナルトが暇つぶしに黒板消しトラップを作ってたが、本当に引っかかるのか？と疑問に思っている………ボフツ………カカシが教室のドアを開け、黒板消しのトラップに引っ掛かってしまった。

一瞬時間が止まったがカカシの一言で時間が動き出した。

カカシ「うーん………お前たちの第一印象は………嫌いだ。」

「（いや、アンタが遅れるのが悪いと思うよ俺は）」

俺は心でそう答えた。言葉に出すと面倒なことになりそうだから・

朧

第7班（後書き）

こんな感じです。

自己紹介と演習（前）

く 朧く

カカシがトラップに引っ掛かった後、衝撃的な一言を言った事で気まずい空気が流れている。今現在俺がいる所は、アカデミーの屋上？みたいな原作で第七班が最初のミーティングをしたとこだ。

はたけカカシ（男）、コピー忍者のカカシと呼ばれる木の葉の白い牙の息子。昔1回だけ実戦を見たことがあるが、写輪眼を上手く使いこなしている。

カカシ「あゝ・・・まずは自己紹介からしてもらおうか」

サクラ「あの・・・」

カカシ「はい、桃色髪の君。」

サクラ「どんな事を言えがいいんですか？」

サクラは内なる自分を出さないように、必死に笑顔を作っている。自己紹介なんだから適当に言っとけばいいじゃねえ。つと俺は思うんだが、

カカシ「そりゃあ好きなモノ、嫌いなモノ。将来の夢とか趣味とか……まあ、そんなのだ」

「まずは、あなたからするもんだろ。普通」

サスケ「そうですよ。私達すっつごく待ったんですよ!!」

カカシ「ん俺か？俺の名前は、はたけカカシ。好き嫌いをお前らに教える気はない!! 将来は……って、俺が将来言ってもなあ。趣味は……色々だ。んじゃ、次はお前らだ。右から順に……」

結局分かったのって名前だけじゃない？とかサクラがサスケに言ってるが、実際それだけだろ。

ナルト「俺はうずまきナルト。好きなモノはサスケや友達、イルカ先生、一楽のラーメン。嫌いなモノは友達を傷つけるもの全て。趣味は修行。んで、将来は誰もが認める火影になることだってばよ!!」

まあ、基本は原作通りだな当然といえば当選か、次はサクラの自己紹介

サクラ「私は春野サクラ。好きなモノ・・・っというか好きな人はいます。嫌いなモノは特にありません。将来は好きな人の支えになれたらいいなーっと思っています」

少し原作と違うような気もするが気のせいかな。次はサスケの番

サスケ「私はうちはサスケ。好きなモノはナルト、嫌いなモノは特にありません。それから、夢なんて言葉で終わらす気はありませんが、一族を復興させようと思っています」

・・・あきらかに原作と違うな。イタチに復讐しないのかな？・・・って次は俺か

「俺は奴良臍。好きなモノは友達や仲間、嫌いなモノはある人は逆らう奴。将来の夢とかは特にありません」

うん我ながら適当だな。・・・するとパンパンと音がした。

カカシ「よし、自己紹介はそこまでだ。明日から任務やるぞ」

任務という言葉に、俺以外の3人が敏感に反応した。俺も怪しまれない程度に期待してるっていう顔をしてるが、ナルトは楽しみだ

っていう笑顔で、サスケは少し不安そうに、サクラは緊張した面持ち、俺は興味ある表情でそれぞれカカシを見る。

俺らを見下ろすカカシは、にやりと笑う。・・・・嫌な笑みだなー本当に

「まずはこの5人だけである任務をやる。サバイバル演習だ」

本来のサバイバル演習は、森や山などで生き残るための練習だ。気配を消すことから始め、敵を見つけるための索敵、または敵から逃げ切る遁術の修練、果てには食べられる植物の学習などいろいろあるんだけど、アカデミーでもやったし、もともと俺には必要ないんだけどなー。まあ今回のサバイバルはこれじゃないけど・・・・・・

サクラ「何で任務で演習やんのよ？演習ならアカデミーでさんざんやったわよ！」

さっそく文句がサクラから出た。それを聞いてカカシが淡々と俺達に言う。

カカシ「相手は俺だが、ただの演習じゃない。」

サクラ「どんな演習なのよ。」

カカシ「俺のやる演習に合格できない者は全員アカデミーに戻ってもらう」

びっくりしてるなー3人。・・・サクラはカカシを「ふざけんじやないわよ!!」という顔で見ている。だけどそれを無視するカカシ。サスケも無言でカカシの事を睨んでるし、ナルトはまだ啞然としてる。

カカシ「とにかく、明日は演習場でお前らの合否を判断する。忍び道具一式持って来い。それと朝飯は抜いて来い・・・吐くぞ。」

二人の鋭い視線を受け流しながら、腰に吊るしたポーチの中からプリントを取り出すと、全員に配っていくカカシ。

ナルト「(落ちてたまるか!!)」

サスケ「(絶対受かってやる!!)」

サクラ「(折角ナルト君と一緒になれたんだから何が何でも受かって見せる!!)」

おお、なんか3人が凄いやる気だ。

「詳しいことはプリントに書いておいたから。明日は遅れて来ないよーに。」

俺・十「『（お前がなカカシ）』」

俺と十尾が心の中で思う。こうして明日サバイバル演習をやることになった俺たちは解散し、俺は部屋に戻り準備をしてから早めに寝た。

〓翌朝〓

ただいまの時刻10…20だ……。……。ポケットに入っていた昨日カカシから配られたプリントを取り出し、もう一度見てみると、集合時間は8…30……。……。完全な遅刻である。……。あの野郎原作通り遅刻しやがって！！予想はしてたけど腹が立つ！！

サスケ「遅いね先生」

サクラ「おっっっっっっそおおおおい！！何やってんのよ

あの人!!」

ナルト「遅い……遅いつてばよ!!」

「ああ、遅いな……。もう帰ろうかな。俺もそんなに暇じゃあないんだがな……」

そしてそれからさらに30分後、ようやくカカシがやって来た。

カカシ「いやあ、諸君おはよう。」

4人『おそーーーーーい!!』

カカシ「いやーごめんごめん、来る途中猫に前を横切られてね。そこから睨み合いになったもんだからさ……。……」

・・それじゃ行きますか」

嘘だ!!（ひぐらし風）絶対嘘に決まっている。他の3人はカカシに文句言ってるが、カカシは無視して演習場に向かうので俺たちはカカシの後に続く。

Ⅱ 演習場Ⅱ

しばらく歩くと演習場に着くそして三つの丸太の上にカカシは目覚まし時計を置く。

そして、丸太の傍にどこから取り出した目覚まし時計を置き、「よし、12時セット完了」と言って俺達に向き直った。

怪訝な顔をしているサスケとサクラ。その時俺は欠伸を一つ。すると、カカシがごそごそとポーチから新たにリンリンと音が鳴るモノを取り出した。原作通り三つの鈴を。

カカシ「ここに鈴が三つある。これを俺から昼までに奪い取るのが課題だ。もし昼までに俺から鈴を奪えなかった奴は昼飯抜き！あの丸太に縛り付けた上で、目の前で俺が弁当食うから。」

やっぱりな・・・・・・・・・・原作通りだ。

十『朝飯食って正解だったな』

全く持ってその通り。他の三人の腹からぐううううううと音がした。ぷぷぷ、サクラサスケは顔真っ赤にしてやんの。ナルトも恥ずかしそうだし。

育ち盛りの年齢である3人にとって空腹とは大敵、もちろん俺もだけど、俺は食べてきたから大丈夫。

カカシ「鈴は一人一つでいい。三つしかないから、必然的に一人が丸太行きになる。っで！　鈴を取れない奴は任務失敗ってことで失格。つまり、この中で最低でも一人は学校へ戻ってもらうことになるわけだ。手裏剣を使ってもいいぞ。俺を殺すつもりで来ないと取れないからな。」

サクラ「でも、危ないわよ。先生！」

「大丈夫だよサクラ。仮にも上忍、下忍の手裏剣なんかくらはねえよ。だろ、カカシ先生？」

カカシ「その通り！よくわかってるねえ。」

俺の言葉にカカシはにっこりと笑って返事する。てかさ、そもそも下忍に殺されるような上忍がいるわけがない。仮にいたとしても、そんな奴に上忍の任務がこなせる筈がない。

カカシ「よしそれじゃ、演習を始めるぞ。」

うかな〜。

「カカシ スタート!!」

・ ・ ・ ・ ・ 本 当 に ど う し よ う か な あ ― 俺 ・ ・ ・ ・ ・

隴

自己紹介と演習（前）（後書き）

特になし。キリッ！！

自己紹介と演習（後）

（朧）

やつほゝ朧だよ。カカシの言葉と同時に俺たち4人は散らばる。そして俺は木の陰に隠れている。

実はこの試験が始まる前、俺はナルト達に協力してカカシから鈴を奪おうと持ちかけていた。ナルトたち3人は囷で、俺は隙をついて鈴を奪う。これが作戦の内容だ。

この試験、うかつにこっちの手の内を見せたら今後面倒だからな、目に目をもって奴だ。

十尾『（下忍でも使えるくらいの術ならいいんじゃないか？）』

「（だよな、よしそれで行こう）」

俺は十尾の言う通り、下忍なら使えて当たり前前の術を使うことにする。

しかし、3人に気を取られすぎだ。

「面白くなってきた。俺も交ざるか（火遁・豪火球の術!!）」

カカシ「!!」

カカシは3人に気を取られていたらしい。ギリギリで豪火球を避ける。

「俺のこと忘れてただろ先生？」

カカシ「いや忘れてないよ。少し油断しただけだ」

「そう、ならこれはどう？（水遁・水手裏剣!!）」

俺は池に手を置き、水で出来た手裏剣をカカシに投げる。

カカシ「そんなんじゃないよ!!」

カカシはこれを避ける。俺たちはこれを待っていた。

カカシの飛んだ方向にはサスケが居て、豪火球でカカシに攻撃する。

カカシ「なに!!」

カカシはこれをうまく避けるが、今度はナルトとサクラが待ち構えており、カカシに手裏剣やクナイを投げる。

カカシ「クッ!!」

やはり上忍これもうまく避け、地面の着地する。っが、そこは俺が予想していた。場所だ。

「（今だ。土遁・液状化の術&土遁・凝固の術!!）」

俺はカカシの着地とほぼ同時に術を発動する。

カカシ「!!」

「つかまーえたー」

ナルト「ナイスだってばよ朧!!」

サスケ「流石朧くん!!」

サクラ「上手くいった!!」

カカシを捕まえ3人は喜ぶ。俺は小声でカカシに話かける。

「どうです先生?俺たちのチームワークと思いは?」

カカシ「驚いた。まさかここまで息の合わせることが出来るとわな」

「これで合格ですよね?」

カカシ「……………いつから気づいてたの?」

「今日の朝ですよ(嘘だけど)。それでみんなに声を掛けたんです」

カカシ「なるほど、まあ、合格だよ。」

「ありがとうございます」

俺はカカシから鈴をもらう。それと同時に目覚まし時計のアラームがなり。演習は終了した。

|| 碑石前 ||

ナルト「これでアカデミーに戻らなくてすむってばよ!!」

サスケ「けど鈴は3つ……1人はアカデミーに戻らなきゃいけないよ?」

カカシ「いや、その必要はない」

サスケの言葉にカカシが言う。

サクラ「どうしてですか? 鈴は3つしかないですよ?」

サクラもカカシに言う。

カカシ「この演習は、お前たちの『チームワーク』と『仲間を思う気持ち』を試すモノだ」

3人「「仲間を思う気持ち？」」「」

カカシ「そうだ。忍者は裏の裏を読むべし。忍者の世界でルールや掟を破る奴はクズ呼ばわりされる。……。けどな！！仲間を大切にしない奴は、それ以上のクズだ！！」

やっと分かって来たのだろう。3人は喜びを顔に浮かべた。

「お前たちはこの演習中、ずっと連携して俺を追い詰めた。そしてなによりお前たちはずっと、仲間を思い、この演習を行っていた。だから全員合格だ。これにて演習終わり！！第七班は明日より、任務開始だ！！」

カカシは笑顔で俺たちに言う。3人も嬉しそうだ。

十尾『（中々見所のある男だな）』

「（ああ、確かにな。．．．．．でも、俺たちの敵だ。それは変わらない）」

十尾『（わかっている。ワシはお前に従うまでだ」

「（ありがとう十尾）」

そういつか俺はみんなと戦いナルトを手にかけることになる。その覚悟はこの世界に着いた時から出来ているし、それは変わらない。つが．．．．．

カカシ「よし、今日の昼はみんなで食べるぞ!!」

サスケ「はい!!」

サクラ「しゃゝんなろゝッ!!」

ナルト「分かったってばよ!!」

「おう!!」

今はこういう時間を過ごしても．．．．．バチは当

たらないよな？

く
朧
く

自己紹介と演習（後）（後書き）

はい。結構グダグダです。

温かい目で見てください。

暁召集

く 朧

やつほー朧だ。俺は今、木の葉の外にいる。えっなんでかって？
そりゃ暁の定例会議があるからだ。今回の会議は火の国の領内で行
われるらしい。

本来なら今は、マダム・シジミの猫『トラ』を探してるで、すぐ
『タズナ』を波の国へ送っているところだろうが、俺は行ってない
(ゼツの分身が行ってる)

「ここだな。」

俺は消遁を解き、『空』の指輪をはめ、目印のある木の前で印を
結ぶ。

ズウウウウウウウウウウン！！

木の横にある岩が上に上がった。

「・・・・・・・・・・・・・・・・初めから岩に目印付けとけよ」

俺が中に入ると幻灯身の術を使っているペイン（長門）がいた。

ペイン「遅かったな」

「ああ、抜け出すのに手間取ってな。それよりみんなは？」

ペイン「そろそろ呼ぼうと思っていたところだ。」

ペインが印を結ぶと幻灯身が次々を現れる。

「???」「やっと着たのか？随分待たせるな。臃？」

「悪い角都。抜け出すのに手間取ってな」

「???」「それは臃の消遁使えばいいのでは？」

「簡単に言ってくれるな飛段。上手くゼツと摩り替わるのは苦勞するんだぞ？」

飛段「私にはよくわからん」

そうか、飛段はゼツと入れ替わったことなかったな。

??? 「なあ、そろそろ始めたほうがええと思うで？」

ペイン「鬼鮫のいう通りだ。そろそろ始めるぞ」

俺達はそれぞれの持ち場に立つ

ペイン「それではこれより定例会議を始める。今回は各人柱力の報告だ。ゼツ・朧頼む」

白ゼツ「はいはい、一尾は今だ目立つ活動はしてないよ。暴走は多いけどね。」

黒ゼツ「二尾・三尾・五尾・七尾・八尾も同ジク目立ッタ活動ハシテイナイ」

白ゼツ「四尾・六尾は抜け人だから転々としてる。」

黒ゼツ「コレデ俺たちカラノ報告ハ終ワリダ」

「次は俺だな。九尾は今んとは、目立ったこそしていないがあれは後々俺たちにとって厄介な存在になるぜ。まあ今は、九尾が自分の腹の中にいることすらきずついてないよ。今は確か波の国へ任務に行ってると思う」

「???」「波の国?ってかなんで朧はここにいるんだ?人柱力と同じ班なんだろう?うん!」

「今はゼツの分身がそばに付いてるから心配ないぞデイダラ」

「???」「……………しかし、油断はできない。……………
……………いつ人柱力が狙われるか分からない」

黒ゼツ「心配ナイズサソリ」

白ゼツ「術で朧本人だと思ってるから心配ないね」

「???」「なんだ、朧の『心呪の術』か?」

「・心呪しんじゆの術…ネギま!の『儉生しぐヌムの符・ヒオレゲンス』まんま。朧の写輪眼を見

せることで発動・停止する。朧オリジナルの術。（万華鏡の能力ではない）」

「ああ、そうだイタチ。あれは他人の分身にも効果があるからな。」

サソリ「・・・・・・・・・・・・・・・・なるほど、それなら問題ない」

ペイン「ああ、朧とゼツは引き続き、人柱力の監視を頼んだぞ。他に何かある者はいるか？」

「俺から一つ、本格的な活動はいつから行うんだ？」

ペイン「大体3年後になる。」

「（やっぱりな・・・・）わかった」

ペイン「もう何もないな。これで会議を終える。各自解散しろ。次は追って連絡する」

ペインの言葉に各自解散していく。俺も洞窟を出る。

「さてと、俺は里に戻るとするか・・・」

俺は里に戻り、ナルト達が帰るのを待つことにした。

（朧）

暁召集（後書き）

・ペイン（長門）…原作と同じ。

・小南^{こなん}…原作と同じ。

・うちはイタチ…性格などは原作と同じ。イメージは『インフィニットストラトス』の織斑千冬。

・干柿鬼鮫…性格などは原作と同じ。年齢は20くらい。イメージは『恋姫無双』の霞（張遼）

・角都…性格などは原作と同じ。イメージは『フェアリーテイル』のエルザ・スカーレット。

・飛段…性格は穏やか。イメージは『インフィニットストラトス』の篠之野箒。

・デイダラ…性格は原作と同じ。イメージは『緋弾のアリア』のジヤンヌ。

・サソリ（本体）…無口な性格。イメージは『ゼロの使い魔』のルイズ。

・ゼツ（白・黒）…原作と同じ。

・うちはマダラ…臆想い以外は原作と同じ。

こんな感じです。

中忍試験・・・・・・・・1

〴〵朧〴〵

暁の会議があつてから2週間後、ナルトたちが帰ってきた。

それからさらに1週間後の今日、俺達とはある建物の屋上にあるベンチに座っている。なぜこんなところに座っているかというとかしに呼び出されたからだ。っが当然・・・・・・・・・・

「・・・・・・・・・・・・・毎度毎度遅いなカカシの奴」

そうもう俺たちはここにもう2時間になる。そして待ち合わせの時間は10時・・・・・・・・・・完全な遅刻である。

「なあ、確認するけどさあ、集合時間って・・・・・・・・・・」

3人「10時だよ（だってばよ）！！」

「だよなあー。寝坊って理由ならもう殴るからな俺」

それから待つこと1時間・・・・・・・・・・

カカシ「よぉ〜悪い悪い。今日は道に迷ってた。」

4人「嘘つくな!!」

やっと来たカカシに、綺麗に決まる俺たちの抗議の声だが、カカシはどこ吹く風で片手をズボンのポケットに入れて、さわやかな笑みを浮かべながらこっちに歩いて来る。

カカシ「今日ここに集まってもらったのは、お前たちを中忍試験に推薦したってことを伝えるためだ。」

4人「・・・・・・・・・・なに!!」

しまった!! もうそんな時期かよ!! 中忍試験があるかなんてしなかったから油断してた!!

3人も、そんな大事なことを簡単に、それも遅れて来たところに言われたので、頭の中が混乱していると思う。

カカシ「試験は明後日の午前8時からだ。それまで各自準備をしておくように、では解散!!」

そしてカカシはそのままどこかへ消えてしまった。

|| 2日後 ||

そしてやってきました中人試験!!そして集合場所の『301』の教室!!つか考えてると『301』と書かれたプレートのある教室の前で喧嘩・・・・・・・・・・じゃないけど騒がしくしている奴らを見つけた。

「あいつら馬鹿なのか?ここは2階だろうが、俺たちはさっさと3階行こうぜ」

俺の言葉に3人も頷き、先に行くことにする。

???「ふゝん、そんなんで中忍試験を受けようっての?止めた方が良くないじゃない、ボク達?」

と、そんな声が聞こえるが無視無視。みんなが待つてるだろうか早く行こー。だが、そんな俺の思いとは裏腹に面倒事があっちの方から絡んできやがった。

ドカツ!!

そんな音が目の前で鳴り視線を少し下げてみると、原作でおなじみのオカッパ、ゲジマユ、全身緑タイツじゃなく、黒の長い髪に、緑のワンピースとズボンを履いた。美形の少女が倒れるのが見えた。

そこに、「リー!!」と悲鳴に近い声を上げて、駆け寄って来るのは髪を左右でお団子にし、簡単な中華風の服を着たテンテンだ。つとかあの少女がロック・リーか……。これは驚いた。いやマジで……………

??? 「おいおい、中忍って言ったら部隊の隊長レベルだぜ? 任務の失敗、部下の死亡……。それは全て隊長の責任になるんだ。それが……」

さっき無視していた声の奴がこっちに歩いて来ながら話す内容はどれもが正しい、が、こんな奴が中忍だと思えば呆れてしまう。

??? 「お前みたいな弱い奴に務まる訳ねえだろうが!!」

パシッ

俺はリーを殴ろうとした奴の拳を止める。

「そこまでだ。中忍がなに弱いものいじめしてんだ？」

俺が中忍の拳を止めると周りから「臆だ!!」などの声が聞こえる。どうやら同期も何人かいるみたいだな。

??? 「なっ、なんだお前!!」

「今回の中忍試験を受けにきた下忍だけど？」

俺はそういうところに仕掛けられた幻術を解く。すると『2・1』のプレートが現れ、周りから驚きの声上がる

??? 「なっ!! お前いつからきずいてた!？」

「いつからって初めからだけど?ここは2階。『3・1』なんておかしいだろ？」

俺がいうと中忍は悔しそうにこの場を去った。

「ふう……」と、リーが息を吐き出した。

「???」約束が違うわよリー。下手に注目されて警戒されたくないと言ったのは、あなたよ?」

ん?リーにそう言って、周りの下忍の中から現れたのは……
……恐らくネジだ。ヒナタに似ているからな。

「それは……」リーは言葉を続けずにネジから視線を切り、熱のこもった視線を俺に向けてきた。ん?なんで俺なんだ?と考えてるとリーは頬に朱を散らして一歩前に足を踏み出した。

「はぁ……これだからうちの班は……」と、テンテンが天を仰ぐように顔に手を当てながら溜息を吐く。そしてリーは俺に言う。

リー「私の名前はロック・リー。貴方の名前を教えてください」

軽く腰を折り、挨拶をするリー。

「俺か？俺は奴良隴だ」

リー「――――奴良隴さん！！あなたに惚れました！！付き合ってください！！」

「ごめんなさい」

俺はリーの告白を断る。俺は時期木の葉を抜けるからな。テンテンはリーの肩を叩きながら「あちゃあ・・・ドンマイ、リー。次、頑張ろう。」っと、苦笑を浮かべていう。ネジがサスケに声を掛けた。

ネジ「馬鹿・・・ねえ、その貴女・・・名前は？」

ネジはサスケを睨みながら、そう言う。

サスケ「・・・人に名を聞くときは、自分から名乗るものだよ？」

ネジ「貴女ルーキーね。歳はいくつ？」

サスケ「答える義務はないなわ」

なんかカオスだな・・・まあいいか俺は1人このまま3階へ向かう事にした。

隴

中忍試験・・・1（後書き）

特にありません。

中忍試験・・・・・・・・2

くく 朧くく

あの後、俺は1人先に教室に入っていた。その後、3人も教室に着き、何時ものメンバーで喋っていると、カブトが話しかけてきた。まあ、俺は軽く無視していたがな。（この時、既に俺は影分身を消遁で姿を見えなくしている）

??? 「静かにしやがれ！ クソ野郎ども！！」

ようやく来たな。黒板の前に白煙が巻き上がり、複数の人影が現れる。その複数の人影は、中忍の服で統一され、額には木の葉の印が刻まれた額当てをつけている。その中で1人、黒いコートを羽織り、木の葉の額当てで頭全体を覆い隠し、顔には無数の切り傷をつけた男。そう森乃イビキ、『拷問のイビキ』だ。

イビキ「待たせたな『中忍選抜第一の試験』試験官の森乃イビキだ」

厳しい眼光を受けた下忍が震えてるし、8人はナルトの服にしがみ付いている。

．．．．．うん、羨ましくはないよ。本当だよ？
断じて！．．．．．羨ましくなんかないからな！！（血の涙
流しています）

イビキ「．．．．．では、これから中忍選抜第一の試験を
始める。志願書を順に提出し変わりに．．．」

席替えで使うような箱を指さすイビキ。

イビキ「この箱の中に座席番号の書かれた紙があるからそれを一
枚引いて、その番号の席に着け。番号はお前達が座っている机の右
上にあるのがそれだ。その後、筆記試験の用紙を配る．．．．．」

チヨウジ「テスト．．．席替え．．．．．終わった．．．
．．．」

チヨウジの背後からズーンって聞こえてきそうなくらい、沈ん
でる。

シカマル「フーン、テストねえ．．．．．
．．．．．チヨウジ、いざとなったらカンニングしなさい。私が許す
わ」

・ ・ ・ ・ ・ シカマル、そこは影真似の術を使って上げようぜ ・ ・ ・ ・ ・

キバ「は……ははは、……テ、テス
トなんて余裕よ！　ね、赤丸！」

シノ「．．．．．キバ。そんなみつともない嘘を付かない方がいい。あなたが賢くないってことわ皆知ってるから．．．．．」

あ、キバが固まった。つてか、シノ酷いな。

サスケ「ナルト……席離れちゃうかね。」

ナルト「大丈夫だってばよ。何とかなるって！」

．．．．．みんながサスケを羨ましそうに見ている。

「まあ、何はともあれ、全員で中忍になろうぜ！」

みんな『おう!!』

力強く、声を出す木の葉のルーキー9人。そんな事を言っていたら俺らの番が来て一人ずつ箱から紙を引いていき、バラバラに座って行く。

俺も箱を掻きまわして一枚引きぬく。そして、番号は28・・・・席の番号と照らし合わせながら歩いていると、その番号と同じ席を見つけ席に座っている。お！前は当たりの中忍だな。

全員が席に座ると、中忍の試験官から問題と答えが一緒になっている答案用紙が配られた。

イビキ「答案用紙はまだ裏のままだ。そして、オレの言う事を良く聞け」

イビキはチョークを手に持ち、黒板を突く。

イビキ「この第一の試験には、大切なルールってもんがいくつかある」

イビキ「黒板に書いて説明してやるが、質問は一切受け付けんからそのつもりでよく聞いておけ」

ルール？何だそれ？とかいろいろ小さな声で、そこかしこから声がする。

イビキ「第1のルールだ！　まずお前らには、最初から各自10点ずつ持ち点が与えられている」

黒板に向かって書きながら話すイビキ。その一声で小さな声は止み、皆黒板をイビキの言葉の一つ一つを聞き逃さないように構える。

イビキ「筆記試験は全部で10問、配点は問題格1点ずつ。そしてこの試験は減点式となっている。つまり問題を10問正解すれば、持ち点は10点そのままだ。しかし、問題で3問間違えれば持ち点の10点から3点が引かれ、7点と言う持ち点になる訳だ。……これが第1のルールだ」

なるほど、0点になったら即退場ってことか、

イビキ「第2のルールだが……この筆記試験はチーム戦、受験申し込みを受け付けた3人1組の合計点数で合否を判断する。つまり、合計持ち点30点をどれだけ減らさずに試験を終われるか、チーム単位で競って貰うってことだ。」

サクラ「ちょ、ちょっと待って！持ち点減点方式の意味ってのも分かんないけど、チームの合計点ってどーいう事よ！！」

後ろからサクラの声が聞こえる。なんちゃって優等生が。

イビキ「うるさい！お前らに質問する権利はないんだよ！これにはちゃんと理由がある、黙って聞いてろ！分かったら『肝心の』第3のルールだ。試験途中で妙な行為……つまり『カンニング及び、それに順ずる行為を行った』と此処にいる監視員たちに見なされた者は、その行為『1回につき、持ち点から2点ずつ減点させて貰う』……」

ってことは原作同様、ばれなきゃいいんだな。

イビキ「つまり、この試験中に持ち点をすっかり無くして退場する奴も出るってことだ」

イビキがルールを説明している間に、監視員って事になってる中忍達が俺達を取り囲むようにしてイスに座る。

イビキ「いつでもチェックしてやるぜ」

イビキ「無様にカンニングなど行った者は自滅して行くものと心得て貰おうか。仮にも中忍を目指す者、忍びなら忍らしく・・・だ」

口元を意味ありげに歪ませ、笑みを浮かべるイビキ。

イビキ「そして最後のルールだ。この試験終了時までには持ち点を全て失った者、及び、正解数0だった者の所属する班は・・・・・・・・・・・3名全て道連れ不合格とする!!」

教室の全員（我愛羅と朧以外）『（なにーーーーー！）』

イビキ「試験時間は1時間だ・・・よし・・・始めろ！」

開始の合図と同時に鉛筆を走らせる下忍達。

――以下略します――

あれから44分ぐらい経過した。俺は影分身でカンニングして9問目まで解けた。みんなそれぞれ上手くカンニングしているようだ。

イビキ「よし、45分経ったな。それでは、これから第10問目の問題を伝える！」

俺は、やっとかーっと思いつながら体を起こし、最後の問題を聞くと体勢を取る。実は最後の問題がなんだったか覚えていないんだよね。まあ、何とかなるだろうと思いつながら俺は耳を傾けた。

〃〃 朧 〃〃

中忍試験・・・・2（後書き）

我愛羅…原作同様、目の下に隈があり、あまり喋らない。イメー
ジは『ぬらりひよんの孫』の家長カナ。

カンクロウ…原作まんま。イメージは『銀魂』の神楽。

ロック・リー…原作とは違い暑苦しくない。イメージは『IS』
のラウラ（黒髪）。

日向ネジ…原作と同じ。イメージはヒナタを『キラッ！』つとし
た感じ。

中忍試験・・・・・・・・・3

（朧）

イビキ「まずお前らには、この第10問目の試験を・・・・・・・・『受ける』『受けない』かのどちらかを選んで貰う!!」

「!!」

俺はイビキの言葉で第10問の問題を思いました。この試験単純に『受ける』を選べばいいだけだ。

テマリ「え・・・選ぶって・・・・・・・・もし10問目の問題を受けなかったらどうなるんだ!？」

イビキ「『受けない』を選べばその時点でその者の持ち点は0となる・・・・つまり失格だ!勿論、同班の2名も道連れ失格だ!」

下1「ど・・・どういう事だよ!？」

下2「そんなの『受ける』を選ぶに決まってるじゃない!!」

下忍達が一斉に騒ぎ始める・・・・・・・・・・まあ、当然だわな・・・・・・・・

イビキ「そして！もう一つのルール。『受ける』を選び、正解で
きなかった場合・・・・・・・・その者については今後、永久に中
忍試験の受験資格を剥奪する！！」

下全員（我愛羅、俺以外）『！！』

それまで、騒いでいなかった奴もこのルールには啞然として、イ
ビキを睨みつけたり、初めに騒いでいた奴らと同じように、騒ぎだ
した。

これが、拷問大好きなイビキの意地悪な問題だ。人間の心を揺さ
ぶる問題、こんな問題を提示されたら普通の下忍なら、『受けない』
を選ぶのは自明の理。

・・・・・・・・だが、ここで『受ける』を選び正解する事が出
来る者だけが中忍という小隊のリーダーになれる。

キバ「ふっ、ふざけんじゃないわよ！！お母さんに聞いたけど、
中忍試験は年に二回。一回落ちても、次受けて合格すれば中忍にな
れるって言ってたわよ！！」

頭に乗せている赤丸と一緒にキバが抗議の声を上げる。

イビキ「ククク……運が悪いんだよ、お前らは。今年はこの俺がルールだ。その代わり、引き返す道も与えてるじゃないか。
……自信のない奴は大人しく『受けない』を選んで、来年も再来年も受験したら良い。」

キバを初め多くの下忍が「え？」つというような顔をする。確かに『受けない』を選べば次の試験で合格でき、中忍に慣れるかも知れない。

イビキ「では始めようか。この第10問目『受けない』者は手を挙げる！番号確認後、此处から出て貰う。」

イビキの問いかけに皆悩む。すると何人かが手を上げようとした時、ナルトが手を上げる。

ナルト「ふざけんじゃねえ！！こんなところで逃げてたまるか！俺は受ける！！受けて必ず中忍になってやるってばよ！！！」

ナルトは振り上げた右腕を叫びと同時に机に叩き付けた。この言葉に手を上げかけていた他の下忍達は勇気を貰ったのか、自信満ちた顔で手を下ろし試験を続ける体制を執る。原作では何名かが手を上げて去ったが、一人も減らなかった。

イビキ「……………もう一度訊く。人生を賭けた選択だやめるなら今だぞ？」

ナルト「真っ直ぐ自分の言葉は曲げねえ。それが俺の忍道だ!!」

イビキ「(うむ……………15番か……………この
いつの言葉で、コイツらの不安が消え、全員残ったか……………)」

審査員である中忍達に、イビキが目配せをして、それに対して中忍達は笑みを浮かべ、一斉に頷く。

イビキ「良い決意だ、では……………此処に残った全員に……………
……………『第一の試験』の合格を申し渡す!!」

下忍全員が、イビキの出題するであろう問題の一字一句を聞き逃さないと言った風に身構えたが、この言葉に、俺以外の下忍達(カブト、我愛羅も)は息を合わせるように、あっ気にとられたようでもポカンとしていた。

サクラ「ちょ、ちょっと、どういう事ですか!?!いきなり合格なんて……………10問目の問題はとうしたんですか!?!」

イビキ「そんなものは初めからない。言ってみれば『さっきの2択』が10問目だな……………」

カンクロウ「え？ い、いや、ちょっと！！じゃあ、今までの1／9問は何だったの！？まるで無駄じゃない！！」

イビキ「無駄じゃないぞ。9問目までの問題はもう既に、その目的を遂げていたんだからな。」

イビキの言葉にみんな『は？』つというような顔をする。

イビキ「お前達個人々々の情報収集能力を試すと言う目的をな！！……………まず、このテストのポイントだが、

最初のルールで提示した『常に3人1組で合否を判定する』と言うシステムにある。何故なら情報とは、その時々において命よりも重い価値を発し、任務や戦場では常に命懸けで奪い合われるモノだからだ。

敵や第3者に気付かれてしまつて得た情報は『既に正しい情報とは限らない』のだ。……………
……………これだけは覚えておいて欲しい！誤った情報を握らされる事は仲間や里に、壊滅的打撃を与える！！

その意味で我々は、お前らにカンニングと言う情報収集を余儀なくさせ、それが明らかに劣っていた者を選別した……………と言う理由だ。」

シカマル「ちょ、ちょっと待って！じゃあ、第10問の意味はなんなの！」

シカマルが意味がわからないという顔でイビキに質問する。

イビキ「10問目こそが、この第一次試験の本当の目的だ。

説明しよう。10問目は、『受けるか』、『受けないか』の選択……言うまでもなく、苦痛を強いられる2択だ。

『受ける』を選び、問題を答えられなかった者は『永遠に受験資格を奪われる』……実に不誠実極まりない問題だ。」

では……こんな2択はどうだ？お前達が仮に中忍になったとしよう、……任務内容は秘密文書の奪取、敵方の忍者の人数・能力・その他、軍備の有無が一切不明。

更には敵の張り巡らした罠と言う名の落とし穴が有るかもしれない……さあ、『受ける』か？『受けない』か？」

イビキは再び、俺達に問う。決まっている。答えは……

イビキ「そう！答えは『受ける』だ！いや、『受けない』という選択肢などここでは出てこない。どんな危険な賭けであっても、降りる事のできない任務もある。

ここ一番で仲間にも勇気を示し、突破していく能力。これが中忍と言う部隊長に求められる資質だ！」

『受けない』を選びここから出て行った下忍達はそれが理解できないだろう。

イビキ「いざと言う時に自らの運命を賭せない者、『来年があるさ』と不確定な未来と引き換えに心を揺るがせる

……そんな密度の薄い決意しか持たない愚図に！中忍になる資格などないと俺は考える！！」

力強い言葉がイビキから発せられる。俺もこの言葉には賛成だ。そんなふざけた気持ちで忍になろうとしている奴は忍を止めるべきだ。父さんなら迷いなくそいつらを殺すだろうけど、

イビキ「『受ける』を選んだお前達は、難解な10問の正解者だと言っている！」

これから出会うであろう困難にも立ち向かって行ける筈だ。

入口は突破した、『中忍選抜第一の試験』は終了だ……
・お前達の健闘を祈る！」

第一の試験を合格した俺達にそう笑みを浮かべるイビキ。だが次の瞬間、窓ガラスをブチ破り、黒い布で包まれた何かが飛び込んできた。

イビキ「！！敵かっ！？」

突然の出来事に、誰かがそう言う中忍とイビキ以外の奴らのほとんどが、忍具を構えた。

真っ黒い大きな布から2本のクナイが飛び出し、黒板に刺さる。黒板に布がクナイによって張り付けられ、布が広がり長方形になった。

そして、中に包まれていたと思われる人物が姿を現した。

??? 「アンタ達、喜んでる場合じゃないわよ!! 私第2試験官! みたらしアンコ! 次行くわよ、次い!!」

全員「(啞然)」

出てきたのは皆さんご存知、特別上忍みたらしアンコ。

アンコの自己紹介は、教室内にいた忍全員を黙らせて、全員の視線を一人占めた。

そういやこんな事もあったなあっと思いながら俺はアンコを見る。

イビキ「空気を読み・・・アンコ。」

『第2試験官 みたらしアンコ見参!!』と大きく描かれた真っ黒な布の近くにいた、イビキがはあと溜息を出した。

その言葉に頬を赤らめるアンコ。誤魔化すかのように咳払いし話し出す。

アンコ「まあ、それは良いとして……ひい、ふう、みい……
……91人!? イビキ、あんた! 全員!?!」

アンコはそう言って、イビキに詰め寄った。でも、イビキもアンコさんの言葉に首を振って答える。

アンコ「フン! まあ、いいわ……。次の『第2の試験』で半分以下にしてやるから……。ああ、ゾクゾクするわ! 詳しい説明は場所を移してやるからついてらっしゃい!!」

アンコはそう言うと、窓から飛び出そうとして、イビキに止められて渋々ドアから出て行った。

こうして、第1の試験は幕を降ろした。次はいよいよ2次試験。さて、これから俺も頑張るかな。

（臃）

中忍試験・・・・・・・・3（後書き）

今回はナルトが目立ちましたが、次は朧を目立たそうと思います。

お知らせ

どうもオシリスです。

実は多数「読みにくい」などの感想をいただきましたので、自分の小説2つを書き直したいと思います。

書き直すと言っても、少し修正するだけの部分も、設定や内容を少し変えるところもあると思います。

プライベートの方も最近少し慌ただしくなって来ましたので、なかなか書き直せないかもしれません。
ですが、このまま放置するということは絶対にありません。

自分の小説を「楽しみだ!」と思ってくれている皆さんには申し訳ありませんが、ご理解のほどよろしくお願いします。

P. S. 気分転換に別の小説を書くかもしれません。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5248v/>

NARUTOに転生（凍結中）

2011年11月13日05時46分発行